

3 なぜ、『源氏物語』には食事・入浴の話がないのか

紫式部の鼻孔はまっ黒だった

世界でいちばんのロングセラーをバイブルだとすると、日本では、たぶん『源氏物語』だろう。

著作後千年、少しもその人気が衰えないのだから、これは『資本論』などの比ではない。しかも明治以後、演劇、映画から現代語訳（もちろん現代語に訳したものは、与謝野、谷崎、舟橋、円地、どれもみな源氏物語そのものではないが）まで、これから派生したものをふくめるとたいへんな人気である。

いまでも、あわて者は、これを読むとすっかり参って、あこがれのため息をついたり、平安時代に生まれてみたいと思ったりする。しかし、老婆心ながら申しあげたいのは、ゆめゆめ平安時代などには生まれたいと思わないほうが身のためだということである。もちろん、過去へ生まれかわるなどということは不可能だが、それよりも、いくらいまの生活が苦しくても、平安時代よりはましだし、まだいまの時代には、明日の希望というものが残

されているということだ。

以下述べる平安時代の生活の真相を知ったら、私の忠告が、嘘でないことがわかってもらえると思う。

しかし、それにしても『源氏物語』の世界は、絵巻物を繰りひろげるように、華麗でロマンティックだ。作者がそんな表現をしたり、人物の対応のしかたをそのように設定したりしたからで、こんな世界は当時でもぜんぜん架空の幻想でしかなかった、と私は思う。

著者の紫式部という女は、父は越前守藤原為時えちぜんのかみふじわらのためとき、母は摂津守藤原為信せつつかみふじわらのためのみねの娘、ともにいわゆる受領うりやうといわれる最下級廷臣の娘として生まれ（実名は不明）、身分相応に藤原宣孝たかの妻となった。しかし、宣孝とは、賢子けんしという娘を生みながら死別したので、一子を育てながら寂しい不安な生活を送らなければならなかった。

この後に、彼女はこの大作をものした。しかも、子どもが寝ついてからの夜、一人灯火に近よって書きつづつていったが、その生活の貧しさと寂しさと暗さが、逆に、理想の男子を主人公に設定し、二十人あまりの美女（中には例外的に未摘花すえつむけなみたいな醜女も現われるが）との間に夢のようなロマンをひろげ、女としての苦悩に身を焼く女性像や、因果応報の摂理も織りなして、この大作はできた。



優雅な『源氏物語』の世界も実は……

(『源氏物語絵巻』より)

前後五十四帖（じゅうしよ）、まさにライフワークで、文章とセンスの卓拔さが無類である点で、私も文学作品の第一に推おすことには賛成だ。

しかし、当時の下級廷臣の実生活を知ってみると、この著者の身边はおよそその作品の舞台とは裏腹の暗いものだった。当時の灯火は、燭台（しよくたい）にももされる油皿から燃える二本の灯心、その明るさは二燭光程度、光源から一五センチ以上も離れると字は読めない。夜ごと執筆をつづける紫式部の鼻孔は、油煙でまっ黒だったろう、なんて失礼な想像をつい、してみたくなる。

両親とも受領の出で、その死後の生活は苦しかったにちがいない。だから彼女も後に上（じょうとうもんいん）東門院に出仕した。いまの言葉で言えば、未亡人の求職運動が成功したのである。就職しなければ生活がやっていけない経済事情に耐えながら、この大文学は書きはじめられたのである。

おそらく、彼女は現実の苦しい世界の反対世界への憬（あこが）れとして、この文学の幻想を作りあげたのではなからうか。

当時の平均寿命は女二十七、男三十二

こう私がとくに思うのは、当時の宮廷を中心とする実生活の現実が、いまの常識では考えられないほど不衛生で、不自然なものだったからである。疫病史や医学史の本を見ると、女の平均死亡年齢は貴族で二十七、八歳、男が三十二、三歳、とくに幼児死亡率は極端に高いうえに、出産による母体の死亡率が高い。これは、体力の低下に運動不足が加わっているからである。

紫式部自身は四十歳ぐらいで死んだ。これは清少納言より少し短いが、当時としてはむしろ長寿に属する。その紫式部は、先輩の清少納言が四十過ぎてまだ生きている姿を垣間^{かいま}見て、女とは早く死ぬべきだという感想を述べている。色香^{いろか}衰えると、女は女としての価値がない、というような考え方のほかに、実際に白髪^{しらげ}のしわくちや婆^{おば}さんなどは少なかったからだろう。しかもその死因は、結核と思われるもの（肺炎もあるかもしれない）が五四パーセント、脚気^{かっけ}が二〇パーセント、中には天然痘^{てんねんとう}にカイセンをふくめて皮膚病が一〇パーセントもある。

当時の公家^{くげ}の日記に、カイセンがかゆくて眠れないので一晩中、東山の麓^{ふもと}を馬で走っていることを書いたものすらある。

なにかにつけて臭かった平安貴族

結核はビタミンAの欠乏、脚気はBの欠乏が原因で、ともに一種の栄養失調だ。それは食事が悪いのが原因だ。だいいち四足獣の肉は、殺生禁断の仏教の教えのおかげで追放されたし、鶏肉は食べない。動物蛋白たんぱくのほとんどは魚貝の乾物だから、これはいくら上手にもどしても、消化吸収率は低いうえに、運動不足だからなお消化されない。飯は、半搗つき米を蒸むしたものだ、これとてカロリーはあっても消化が悪い。生鮮食はごく少ないが、わずかの救いは、毎食海藻を食べることぐらいである。当時の女性の髪の毛の長いのは、幼年期に毎日頭髪を剃そったり、サネカズラの液汁を髪に塗るほかに、この海藻からとるヨードのおかげが大きかったと思われる。それは『大鏡おおかみ』に村上天皇の中宮になられた藤原芳子よしのが結婚こ（入内いりない）されるときの有様を書いたものに、

「内へまゐり給うとて、御車にたてまつりけれど、わが身は車に乗り給ひけれど、御ぐしのすそは、母屋の柱のもとにぞおはしける」

と、まさに尾長おながどり鶏みたいなことを書いたものがあることでわかる。その長さを当時の貴族邸宅の大きさに計算すると、なんと五メートル近くになる。髪が長いことが当時は女の美の第一条件だった。二十六、三十一

この調子でいくと、いまの婦人たちはたいていカットしているから、これは垂れ尼たまと言
って、半分世をはかなみ、あきらめた姿だということになる。とにかく、髪だけ長くても
全身が不健康だったらせんぜん意味がない。

さらに、当時の公家には入浴の風習があまりひろがっていない。だいいち、『源氏物語』
にも、食事の記事とともに入浴描写がない。逆に清少納言は、女の襟えりにつけた白粉おしろいが、あ
かで浮き上がって唐衣からぎぬの襟をよごしている有様を書いている。夏は水浴や水拭ふきをする
が、とくに冬は入浴の風習がなく、病気のときの水蒸気浴（これを風呂という）があるくら
いだから、肌は不潔で臭かった。

これが、薰物たきものといわれる香こうが発達するもとだが、いくら匂いをたきこめても、体臭と人
工の匂いは共存してしまふ。いまの人々の想像を越えて唐衣装束しやうぞく（俗ひとえにいう十二単衣）の女
は近よると体臭がそうとうひどかったと思うべきだ。そのうえ、風邪でもひくと、生ニン
ニクをかじるからますます臭い。これは『源氏物語』に、男に対する女の返事に、今夜は
ニンニクを食べて臭いから通って来ないでくれ、という意味のことを書いてあるので明
らかだ。

いやなことばかりならべて申しわけないが、宮殿内や貴族の室内も臭かったと思われ

る。それは便所という隔離された場所がなく、長方形の樋箱ひばこ（砂を底にした箱）に室内で用便をするからである。冬の夜など、わざわざそれを鴨川かもがわまで流しにも行けず、部屋に置いてあると、男が通って来ても、その臭気は、やはり室内の薰物に立ちまじって臭におったと思われる。

最後に、冬の寒さだが、平安時代の末期は日本の寒冷周期に当たり、現代よりもずっと寒かった。それなのに宮殿はもちろん、貴族の邸宅も板敷き床で、そのうえ天井板がない。二、三十坪のがらんとした室内では、炭櫃すびつ（方形火鉢）、火桶ひおけ（円形火鉢）ぐらいでは暖かくならない。

寝るときは今の畳の上で、衾ふすまという布を使って寝るが、夜着を通してくる寒気で容易に寝つかれないものだった。それがやがて、怨霊おんりようや物の怪ものけみたいなものを考えつくもどたったようにも思われる。